様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３４４９

研究課題名（和文）現代韓国語の尊敬形の不使用基準に関する研究：社会言語学的観点と文法的観点から

研究課題名（英文）Standards for Non-usage of -si- in Modern Korean: From Sociolinguistic and Grammatical Perspectives

研究代表者
金　アラン（KIM, AHRAN）

上智大学・言語教育研究センター・准教授

研究者番号：９０７１１１３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：韓国語の尊敬形‘-si-’は日本語の尊敬語より使用範囲が広いが、高めるべき相手に対して常に‘-si-’が用いられるわけではない。一連の会話において使われたり使われなかったりするが、その基準はまだ明らかになっていない。本研究では‘-si-’の不使用基準を明らかにすべく、ドラマのシナリオと話し言葉コーパスを分析したほか，韓国語母語話者を対象にアンケート調査を行った。その結果、社会的関係や親密度だけでなく、発話時の話し手の心理的態度や発話内容，文の機能や文法的要素等が‘-si-’の使用・不使用に総合的に影響を与えていることが確認できた。研究成果の一部は国内外の学会で発表し、また論文にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
既存の敬語に関する研究は、どのような関係の人に対して、どのような状況で敬語が用いられるかに主な焦点を当ててきたが、本研究は丁寧体を使用する間柄における尊敬形の不使用基準を明らかにしたものである。また本研究は、会話の丁寧さを維持しながら相手との心的距離を縮めるという高度なコミュニケーションの実現様相を明らかにしており、その結果は学習者はもちろん、母語話者にとっても実用的に活用できるものである。

研究成果の概要（英文）：The Korean honorific form -si- has a wider range of use compared with Japanese honorifics. However, -si- is not always used for those who should be regarded as higher in status. It may or may not be used in a series of conversations, but the criteria for when it is used are not yet clear. This study analysed drama scenarios and spoken language corpora, and conducted a questionnaire survey on Korean native speakers to clarify the criteria for non-usage of -si-. The results confirmed that social relationships and intimacy, the speaker’s psychological attitude during an utterance, the content of the utterance, the function of the sentence, and grammatical elements comprehensively influenced the usage or non-usage of -si-. Some of the research results have been presented at academic conferences in Japan and overseas and have been summarised in papers.

研究分野：社会言語学

キーワード：尊敬語の不使用　韓国語　-si-　社会言語学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本語と韓国語は、敬語体系を有し、話し手が相手との社会的・心理的関係によって言葉を使い分ける点で共通している。そのため、敬語を有さない言語を母語とする学習者より、日本人韓国語学習者と韓国人日本語学習者は互いの敬語を比較的、容易に習得できると考えがちである。しかし、実際はそれほど単純ではない。申請者は以前、日本に留学した経験のある韓国人と、韓国に留学した経験のある日本人を対象に日韓の言語文化に関するインタビュー調査を行った。調査の結果、前者は謙譲語において、後者は主体敬語（＝尊敬語）において、難しさを感じていることが明らかになった。韓国人日本語学習者が日本語の謙譲語を苦手とする理由は、韓国語には「お＋連用形＋する」（例：お出しする）のように謙譲の意を生産的に表す形式が存在しないためである。一方、日本人韓国語学習者が苦手とする尊敬語は、「語幹＋시(si)＋語尾」で表され、日本語の「お＋連用形＋になる」（例：お読みになる）、「語幹＋(ら)れる」（例：読まれる）のように生産的な形式で尊敬の意を表す。では、なぜ対応する形式が存在するにもかかわらず、日本人韓国語学習者は尊敬語の習得に難しさを感じるのだろうか。

２．研究の目的

日本人韓国語学習者が韓国語の尊敬語の習得に難しさを感じる背景には、次の 2 つの理由があると考えられる。

［1］韓国語の尊敬語は日本語の尊敬語に比べて使用範囲が広い。

日本語と韓国語は、年上に対して「です・ます」の丁寧体を用いる点で共通しているが、尊敬語の使用範囲において違いが見られる。韓国語では丁寧体を用いる相手には尊敬形‘-si-’をともに用いることが多く、例えば、大学 1 年生が 2 年生の先輩に対して「ku chayk ilk-usy-ess-eyo?（その本お読みになりましたか）」のように話すのがごく普通である。一方、同様の関係で日本語では「読みましたか」と言うのが一般的であり、「お読みになりましたか」や「読まれましたか」を使用することは少ない。韓国語の尊敬形‘-si-’は、日本語の尊形語より使用範囲が広く、このずれが難しさの理由の一つと考えられる。

［2］一連の会話で‘-si-’が用いられたり用いられなかったりするが、その基準が明らかになっていない。

日本人韓国語学習者が［1］を理解すると、年上に対して一貫して‘-si-’を使うようになる。しかし、すべての発話に‘-si-’を付けると丁寧すぎる印象を与え、心的距離がなかなか縮まらないという新たな問題が生じる。韓国語母語話者の実際の会話では、(1a),(1b)のように同一人物に対する一連の発話において‘-si-’を使用したりしなかったりすることが観察される。

(1) a. hwanyenghoy ka-si-cyo? hoypi nay-ss-eyo?
「歓迎会行かれますよね? 会費支払いましたか。」
b. hwanyenghoy ka-cyo? hoypi nay-sy-ess-eyo?
「歓迎会行きますよね? 会費お支払いになりましたか。」

このような‘-si-’の使用・不使用については基準がはっきりしておらず、学習者に提示できる情報はほとんどない。尊敬語に関する既存の研究を見ると、敬語全般における主体敬語の役割と、‘-si-’の機能を論じた内容がほとんどで、‘-si-’の不使用基準については言及がない。本研究では、尊敬形‘-si-’が用いられたり用いられなかったりする一連の会話において、具体的にどのような時に‘-si-’の不使用が見られるかを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、韓国語の尊敬形‘-si-’の不使用状況を明らかにすることを目的とし、ドラマのシナリオと話し言葉コーパスをデータとして用いたほか、韓国語母語話者を対象にアンケート調査を行った。ドラマのシナリオをデータとして用いた理由は、様々な場面と多様な人間関係における‘-si-’の使用・不使用状況を明らかにするためである。しかし、ドラマは書かれたものであり、自然さに欠けるという指摘があるため、韓国語の話し言葉コーパスもデータとして使用した。また、韓国語母語話者を対象として、‘-si-’の使用・不使用に関するアンケート調査を行なった。ドラマで見られた‘-si-’が一時的に用いられなかった例を取り上げ、具体的な発話状況を提示した上で、その状況で‘-si-’を用いるかどうかを問う内容である。

４．研究成果

分析の結果、社会的関係や親密度だけでなく、発話内容や文の機能、文法的要素などが総合的に‘-si-’の使用・不使用に影響を与えていることが確認できた。
まず、発話内容や文の機能に焦点を当てて分析した結果を以下に示す。

(1)情報の羅列や補足・注釈に当たる発話で‘-si-’の不使用が確認された。特に話題に対する付加的な情報を話し手が付け加えたり、相手に補足情報を求める時によく見られた。
(2)客観的な事実を尋ねたり言及したりする時に‘-si-’の不使用が確認できた。‘-si-’を用いないことで話している内容が一般化できる情報であることを表す場合もあった。
(3)談話の開始部や終止部では‘-si-’が用いられる場合が多く、尊敬形‘-si-’は談話標識の機能も担っていると考えられる。
(4)年齢の上下関係にかかわらず、話し手が相手に何かを指示できる立場の場合には‘-si-’を伴わない禁止文が使用される場合があった。また、情報量が多い人が少ない人に対して何かを指示したり禁止したりする時に‘-si-’の不使用が確認された。
(5)話し手に時間的な余裕や心理的な余裕がない時にも‘-si-’の不使用が見られた。
(6)相手の言動に対して不満を述べる時にも一時的に‘-si-’の不使用が確認された。
(7)命令・依頼文では、相手の行動によって自分が恩恵を受ける時は‘-si-’が用いられる傾向が強い反面、自分が恩恵を受けない、もしくはその恩恵が少ない場合は‘-si-’が用いられないことがあった。さらに、相手に要求する行動の負担度によっても‘-si-’の使用に違いが見られ、負担度が低い場合は‘-si-’が用いられない場合があった。

次に、文法的な面に焦点を当てて分析した結果を以下に示す。

(1)動詞や形容詞よりは指定詞で、終止形よりは連体形で‘-si-’の不使用が多く見られた。
(2)連結語尾で終結する発話でも‘-si-’の不使用が見られた。
(3)「家に帰って休む」のように動詞が 2 つ続く場合は、後ろの動詞にだけ‘-si-’をつけ、前の動詞には‘-si-’をつけない場合が多かった。
(4)説明疑問文や判定疑問文のように、相手に返答を求める場合は‘-si-’が用いられる傾向が強い反面、修辞疑問文のように相手に返答を求めない場合には‘-si-’が用いられない場合もあることが確認された。
(5)動作性が弱い‘issta(いる)’や認知動詞‘alta(知る・分かる)’、可能表現を用いて相手の行動を述べる際にも‘-si-’が用いられない場合があることが明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 金アラン	４．巻 31
２．論文標題 韓国語の丁寧体の会話における'-si-'の不使用に関する一考察－話し言葉コーパスをデータとして－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Lingua	６．最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 金アラン
２．発表標題 韓国語の丁寧体談話における先語末語尾'-si-'の不使用に関する一考察（原語：韓国語）
３．学会等名 2020年度日本語文学会秋季国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 金アラン
２．発表標題 日韓語の尊敬語に関する一考察：使用範囲の違いに焦点を当てて
３．学会等名 LEAP 言語学と言語教育学：理論と実践、そして応用へ
４．発表年 2019年

１．発表者名 金アラン
２．発表標題 『中納言』に見る日本語の尊敬語の使用実態(原語：韓国語)
３．学会等名 韓国日本研究総連合会 第8回国際学術大会及びシンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 金アラン
２．発表標題 韓国語の尊敬形'-si-'の不使用状況に関する一考察：ドラマの台詞をデータとして
３．学会等名 第42回社会言語科学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 金アラン
２．発表標題 先語末語尾'-si-'が用いられない発話状況に関する一考察：ドラマの台詞とアンケート調査の分析結果を中心に【原語：韓国語】
３．学会等名 第9回日本韓国語教育学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関